

御由緒

旧記によればこの大神此の地に鎮座したのは、今より一五五〇年余(西暦四六〇年)の昔、雄略天皇の四年十二月晦です。大神は天皇との間に諸事有つて京の葛城山を出られ、船に乗つて海に浮び浦ノ内南半島の太平洋岸にご上陸。海水煮き火食せられ、その立ち上る煙を見た里人が行つて見ると、現人神であられたので、尊び敬つて大神と御船(金剛丸)を担ぎ、山を越え玉島(現社殿地)に迎えた。そして宮殿を建て大神を奉安し、御船は社殿右脇の山に封じ、御船山として注連縄を張り、大切にしている。



御神徳

- 海上安全 漁業繁栄
- 五穀豊穰 産業繁栄
- 縁結び 子孫繁栄

重要文化財 鳴無神社

御神徳 縁結び 御祭神 一言主神 (味鉏高彦根神)

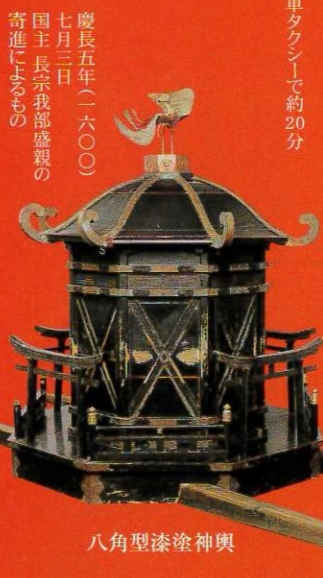
ひとことぬしのかみ あじすきたかひこねのかみ



鳴無神社

高知県須崎市浦ノ内東分字鳴無三五七九
電話〇八八九一四九一〇六七四
〇八八九一四九一〇五三三(自宅)

- 【交通のご案内】
- 高知自動車道「土佐インター」から国道56号を西へ「鷹ノ巣」より県道47号「戸波浦トンネル」を経て浦ノ内
 - 高知自動車道「須崎東インター」から県道23号「須崎仁ノ線」で浦ノ内
 - JR須崎駅下車タクシーで約20分



八角型漆塗神輿

慶長五年(一六〇〇)七月三日
国主長宗我部盛親の寄進によるもの

土佐の宮島

鳴無神社

高知 須崎市浦ノ内



重要文化財
おとなし
鳴無神社

御祭神

三宮主神(ひとことぬしのかみ) 又の御名を味鋤高彦根神(あじすきたかひこねのかみ)

鳴無神社の創建は、一五五〇年余前(西暦四六〇年)の古社で、現社殿は土佐二代藩主山内忠義公が一六六三年に再建したもの。

「本殿」は二間四面の春日造こけら葺。極彩色内陣で、天井には天女の舞の絵(伝村上龍門 筆)が描かれ、「幣殿・拜殿」は切妻造こけら葺で、いずれも社宝である「鰐口」とともに、国の重要文化財に指定されています。

夏の「大祭」志那弥(しなね)「大祭」(毎年八月二十五日)ではお船遊びと称し、大漁旗をなびかせた漁船の海上パレードが勇壮に行われ、秋の「大祭」(チリヘツポ) (旧八月二十三日)では、神の子の結婚式が厳かに行われます。



寛文三年七月三日奉奇進
藤原忠義公
御末孫鰐口一
國宝遷遷文化財

鰐口(重要文化財)
藤原忠義公が
寛文三年七月三日奉奇進



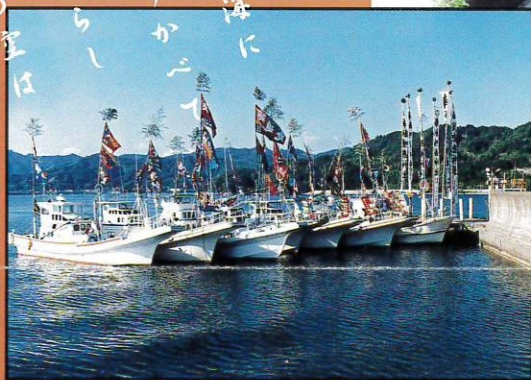
志那弥大祭
(神輿の出発)

夏の「大祭」志那弥大祭(八月二十五日)
本殿祭御神幸お船遊び



拜殿(重要文化財)

創建一五五〇年余昔
波静かな入江の奥
時代とともに伝えられてきた
荘厳華麗な社殿を拝し
はるかな昔の物語に思いを馳せる



志那弥大祭(お船遊びの海上パレード)

土佐の海に
御船うかべ
遊ぶらし
都の空は
雪解のどけき
新勅選和歌集
藤原家隆朝臣



本殿(重要文化財)

秋の大祭(チリヘツポ)旧八月二十三日



チリヘツポ(行見・斎女の結婚式)



チリヘツポの
一行